

小学校社会科における真正の学び

ー現実社会とのつながりに着目した産業学習の実践ー

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 初等教育分野 大勝佑介

1. 昨年度の研究の反省から

予測が困難な時代を迎えていると言われて
いる現在、『小学校学習指導要領（平成29年
告示）解説社会編』（以下、解説）では、社会
への関わり方を選択・判断したりする力や、
それらを適切に表現する力の育成が目標に明
記された。子ども達が主体的に社会に関わる
力を身に付けていくことの重要性が一層増し
ており、それは自身のこれまでの教職経験か
らも強く感じている。しかし、OECD 国際教
員指導環境調査（TALIS）2018を見ると、授
業において児童生徒に課題解決の手順を選択
させたり、困難な課題を提示したりしている
と答えた教員はほんのわずかであり、社会に
関わる力の育成に十分に取り組めていない現
場の課題が浮き彫りになった。

そのような背景を踏まえ、昨年度の研究で
は「よりよい社会のあり方を主体的に考え判
断する市民的資質の小学校段階での育成」を
目的とし、フレッド・M・ニューマン（2017）
らの開発した『『真正の教授法』向けスタン
ダード』（以下スタンダード）に基づく第6学
年歴史学習の授業開発を行った。スタンダード
は「知識の構築」「鍛錬された探究」「学校外
での価値」の3つを基準とし、ニューマンは
授業の中でそれらを達成することで、「広く子
ども達の知的側面の質の向上を生み出す」と
いう研究成果を示している。昨年度、そのス
タANDARDと解説を基に、小学校社会科学習
において真正の学びを実現する系統的・段階
的な構想表を作成した（表1）。その表に基づ
いた授業構想と実践を行い分析する中で、結
果として上記の市民性の育成を図ることへの
有用性を見ることができた。

一方、スタンダードの基準の一つである「学
校外での価値」については課題が残った。ニ
ューマンは「共同体への参加動機を刺激する
ことこそが、真の学びを生じさせるために有
効な手段」と述べ、学びを現実社会の文脈に
つなげることの必要性を主張すると同時に、
子どもたちが「学校外の聴衆に影響を与える
目的で言説を生み出す」ことや、「学校外部者
を含んで言説を評価する」ことの重要性を述
べている。しかし、昨年度の実践では学校外
部者の協力を得るには至らず、それらが児童
の学びの真正性に及ぼす影響や効果を検証す
ることはできなかった。

そこで、継続して前述の市民性の育成を目
指す中で、今年度は「学校外での価値」に焦
点を絞り、現実社会との関わりを軸に深い学
びを実現するための授業構想と実践を行った。

2. 今年度の研究目的

（1）児童が学ぶ意義を見出すために

ニューマンの提唱する真正の学びに対し、
渡部（2017）は「真正の学び／学力は、（中略）
『その知識やスキルなどは、実際の社会生活
の場面のいつ、どこで、そしてなぜ用いるべ
きであるのか』を理解すること」が必要であ
ると述べている。また、後藤（2021）は「（前
略）学ぶ必要性和意味の自覚には、学びを切
実に迫る『現実の社会生活の文脈』が欠かせ
ない」として、子ども達の学びが学校外の文
脈に触れることの必要性を主張している。

これらのことから、児童に市民性を養うた
めの深い学びを実現するためには、現実社会
との関わりを基に、社会科を学ぶ意義を具体
的に実感させることが重要であると考えら
れる。

表1 真正の学びの系統的・段階的構想表
(今年度の研究に関わる第5学年のみ抜粋)

「真正の学び」の指標			第5学年
知識の構築	真正の教授法	真正の評価課題	情報の組織化選択肢(代替案)の考察 ・学んだ知識を活用して問題の解決に取り組み、自分なりの新たな解釈や説明を生み出すもの(知技・思判表)
		真正の指導法	より高次な思考 ・既存の知識を土台にし、情報や考えをまとめる中で、新しい意味づけや理解を生み出させる(知技・思判表)
		子どもの真正のパフォーマンス	分析 ・情報の比較、関連付け、総合などを行うことで、異なる考え方や視点の考察を生み出している(知技・思判表)
鍛錬された探究	真正の教授法	真正の評価課題	学問的内容学問的プロセス卓越した文章による伝達 ・5年生の内容と国民生活との関連について理解し、社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的多角的に考察するもの(知技・思判表) ・社会に見られる課題を把握し、解決に向けて学習したことを基に複数の立場を踏まえて選択・判断し、根拠や理由を明確にして主張や説明を文章に表すもの(思判表・知技)
		真正の指導法	深い知識内容のある会話 ・議論を通して他者と協働的に追究し、自分の立場や根拠を明確に主張したり考えを再構築したりさせる(思判表)
		子どもの真正のパフォーマンス	学問的概念卓越した文章による伝達 ・導き出される理論や原理について理解し、それらを活用して具体的な情報や出来事について一貫性のある説明や主張をしている(知技・思判表)
学校外での価値	真正の教授法	真正の評価課題	学校外の世界と結びついた問題 ・現実社会で直面するであろう問題と同じものに触れ、対処の仕方を考えるもの(知技・思判表) ・学校外の聴衆に影響を与えられるよう、内容や表現を工夫して知識を伝達したり生産物やパフォーマンスを提供したりするもの(思判表)
		真正の指導法	教室を超えた世界との結びつき ・学んだ知識を、公的問題や未来の社会のあり方など学校外の生活において判断せねばならないことと結び付けさせる(思判表)

学びが学校内に留まり外の世界に広がっていないものでは、児童が学ぶ意義を感じることは望めず、予測が困難な社会の中で主体的に考え判断する力の育成には結びつかないであろう。授業の中で実際に現場が抱える課題に対峙させたり、その影響や在り方について一緒に考えさせたりすることで、子ども達は学ぶ意義や目的を感じ、より主体的に深い学びに向かっていく姿が期待できると考える。

そこで、児童が学ぶ意義を実感する授業づくりに向けて、「学校外での価値」の基準においてニューマンが必要性を主張する「互惠関係」の構築に着目した。まず、専門職や行政などの現実社会の共同体に授業づくりに携わっていただき、実際に現場で問題になっていることや議論されていることなどの情報を提供していただく。それに対して、児童はその問題の影響や今後の共同体の在り方について一緒に考えたり、自分たちの思いや願いを表現して伝えたりする。このように、共同体からリアルな学びを提供してもらうだけでなく、児童からも共同体に対して「影響を与えたり貢献したりする」という互惠関係の構築を意識付けながら学習を進めることで、児童は学ぶ意義をより具体的に実感することができるのではないかと考えた。

また、授業を構想するに当たって、事前に対象児童にアンケート調査を行った。その結果、社会科を学ぶことは必要だと感じているが、その意義が具体的ではなく漠然としている児童が多いこと、複数の児童が社会科の学びと実生活との関わりを見出せていないこと、課題についての考えや思いを表出する経験が乏しいことなどの課題が見られた。(表2)

表2 考察に関わるアンケート結果

質問項目	肯定	否定
社会科の学習で学んでよかったと思うことはありますか。	87%	13%
社会科の学習はこれからの生活の役に立ちますか。	76%	24%
問題について深く考えたり、考えたことを表現したりしていますか。	25%	75%

(2) 研究の目的および仮説

以上のように、昨年度の研究の反省と改善点、事前アンケート調査の結果等を踏まえ、今年度の研究目的を「ニューマンの学びのスタンダードを基にした現実社会との互惠関係を構築する授業構想が、児童の学ぶ意義の実感と学びの深まりにどのような効果をもたらすのかを検証する」として研究を行った。研究仮説として、以下の2つを設定した。

表3 研究仮説

仮説1 学びのスタンダードを基にした授業構想において、児童に現実社会の共同体との互惠関係を意識させることで、社会科を学ぶ意義を具体的に実感させることができる。
仮説2 社会科を学ぶ意義を具体的に実感させることで、より主体的に社会的事象や課題を追究したり、自分なりに判断し表現しようとしたりする児童の姿につながる。

検証を行う中で、「これからの社会の在り方を自分たちで考えることができる」などの社会科を学ぶ意義を具体的に捉えた記述や説明が多数あれば、仮説1は支持されたとする。また、社会科を学ぶ意義を具体的に捉えた児童のうち、様々な視点や立場から多面的・多角的に事象や課題を深く追究したり、それらを根拠に自分なりに判断し表現したりする記述や説明が多数見られれば、仮説2は支持されたとすることにした。

3. 授業構想と具体的な手立て

研究対象は、山梨県公立小学校、第5学年児童54名（2クラス）である。児童の変容の様子をより詳しく見取れるよう、今年度は産業学習における複数単元での実践を行った。児童の学ぶ意義の実感と学びの深まりの変容を、記述や説明、事後アンケートの結果から見取るようにした。そして、現実社会の共同体との互惠関係を構築する授業づくりに向け、それぞれの単元で児童にとって身近な地域の専門職に協力を依頼することにした。以下にそれぞれの単元の概要を示す。

表4 単元の概要

実践1 ①小单元名 「米づくりのさかんな地域」総時数 10 時 （教育出版 『小学社会 5』 P60—P81） ②单元目標 ・日本の米づくりにおいて、自然条件との関わりや消費量を増やす取組などに着目して概要を捉えたり、生産の工程や人々の協力関係などに着目して携わる人々の工夫や努力を捉えたりすることで、米づくりが国民の食糧生産を支えていることを理解できるようにする。（知識・技能） ・日本の米づくりについて、現実社会との関りをもとに多面的・多角的に考察し、それをもとに今後の農業の在り方や発展に必要なことを判断し表現できるようにする。（思考・判断・表現） ・主体的に現実社会での問題を見出したり学習問題を追究したりし、今後の農業の在り方を考えようとしている。（学びに向かう力・人間性） ③協力を依頼した専門職 地域の農業協同組合
実践2 ①小单元名 「日本の工業生産の今と未来」総時数 11 時 （教育出版 『小学社会 5』 P152—P167） ②单元目標 ・日本の工業生産において、人々の協力関係、技術の向上、輸送、価格や費用などに着目し、工業の盛んな地域の分布や工業生産に関わる人々の工夫や努力を捉えることで、工業生産が国民生活の向上に重要な役割を果たしていることを理解できるようにする。（知識・技能） ・日本の工業生産の特色について、現実社会との関わりをもとに多面的・多角的に考察し、それをもとに今後の工業生産の発展に大切なことを判断し表現できるようにする。（思考・判断・表現） ・主体的に現実社会での問題を見出したり学習問題を追究したりし、今後の工業生産のあり方を考えようとしている。（学びに向かう力・人間性） ③協力を依頼した専門職 地域の企業（自動車用ブレーキ部品を製造する中小工場）

2つの実践に共通して、「現場で課題とされていることや議論されていることなどの情報の提供」「児童からの質問への回答」「児童の記述や意見文に対する評価やアドバイス」の3点を専門職に依頼した。ゲストティーチャーとして学校に招くような単発的な関わりではなく、単元を通して継続的に授業作りに関わっていただくという点に、今回の研究の特

色があると考え。なるべく負担にならないよう電話やメールでのやり取りを基本とし、児童からの質問や記述はまとめて整理した形にしてから送るよう配慮した。

それらの専門職からの情報を基に、具体的な手立てとして「情報提供に基づいた学習問題の設定や学習過程の調整」「学習問題についての考えを蓄積する振り返りシートの活用」「学習問題について判断し表現する時間の設定」の3点を、2つの実践を通して行った。なお、紙幅の都合上、実践1については成果と課題のみ以下に示す。

4. 授業の実践

(1) 実践1の成果と課題から

実践1を通して、学ぶ意義を具体的に捉える記述や、事象や課題について多面的・多角的に追究していく記述が複数見られるようになった。その反面、互惠関係を児童に意識させることや、教師側で専門職の知見をもとに学習過程を調整すること、また児童が初めから現実的な学習問題について考えを表出することの難しさが課題として表面化した。

そこで、2つ目の実践に向けて、専門職と児童が直接対面してやり取りする時間を設定すること、事前の指導計画に囚われず専門職からの情報やフィードバックに応じて学習過程を柔軟に調整すること、単元を二段階構成にし、現実の課題を追究する学習問題は単元の後半に設定することなどの改善を行った。

(2) 実践2の概要

実際に行った指導過程を表5に示す。単元全体を挟み込むような形で、合計で4回専門職に協力していただいた。事前に提供していただいた情報や資料を基に、単元の前半（第4時まで）では日本の工業生産の特色について捉える学習問題①「日本の工業生産がどこでどのように行われているのかを詳しく調べ、特色をつかもう」を設定し、認識を広げる時間として設定した。専門職から提供していただいた「具体的な生産工程の流れ」「精密加工の様子」「他企業との協力体制」などの資料を

基に、児童にとって見えにくい中小工場の特徴や働きを具体的に捉えさせるようにし、日本の工業生産全体に果たす役割を考察させることにつなげた。振り返りシートには学習問題①の解決に向けて、その時間に一番大切だと思ったことを記述し蓄積させるようにした。

前半終了時には専門職と児童がリモートで対面する時間を設定し、それまでの学習の中で疑問に感じたことやさらに知りたいことについて質問に答えていただいたり、実際に現場で課題とされていることについて直接教えていただいたりした。後日文書での回答もいただき（図1）、その情報を基に、第5時の中で現実的な課題を追究する新たな学習問題②「日本の工業生産がこれからも発展していくために、大切なことは何だろう」を設定した。

Q、なぜ多くのメーカーと協力し合って生産しているのですか

A、中小工場ではそろえられる機械や働く人数には限りがあります。そこで、製品を材料から形にするのは加工屋さん、製品がサビないようにするのはめっき屋さんなど、それぞれの会社が自分の得意な仕事を専門にして、協力して製造しています。

図1 専門職への質疑応答（一部抜粋）

その後、教えていただいた現場の課題を3つの視点に整理し、単元の後半（第6時から8時まで）、に一つずつ考察させるよう学習過程を調整した。振り返りシートには学習問題②の解決に向けて、毎時間その時点での学習問題に対する自分の考えを記入させるようにした。単元の終盤（第9時）にはこれまでの学習を踏まえて学習問題に対する考えを思考ツールを用いて表し、議論を通して考えを吟味させ、それを基に最終第10時に意見文を作成させた。意見文は専門職に読んでもらうことを考慮し、自分たちの思いや願いが伝わるように意識して記述するよう促した。（図2）

日本の工業生産が発展していくためには、日本の優れた技術を活かしていくことが大切だと思います。なぜなら、 のように、ここでしか作れない!!という製品を作ることで、日本の製品の素晴らしいところを広めても技術が高かったら外国や他の工場に真似されることもあまりないと思うし、利用者の立場からすると、あの工場の製品がほしいなと思ってたくさん買ってくれると思うからです。

図2 最終時に作成した意見文（一部抜粋）

表5 「工業生産の今と未来」単元の展開（概略）

時数	目標	主な学習活動	評価
【専門職への依頼①】 中小工場の特色や生産の様子などの情報の提供			
1	身近な工業製品の生産の現状から、国内の工業の産地や工業の種類と生産額などに着目して学習問題①を設定し、追究の見通しをもつ（学びに向かう力・人間性）	○自動車以外の身の回りの工業製品に目を向け、それらは便利で快適な生活を送る上で欠かせないものであることに気付く。 【日本の工業生産について調べたいことを考え学習問題をつくろう】 ○身の回りの工業製品のパッケージなどをもとに生産地を調べて白地図にまとめ、工業生産が全国各地で行われていることに気付く。 ◎農業や水産業の学習を想起し、生産が盛んな地域や流通、改良などの視点から工業生産についてさらに調べたいことを話し合う。 【学習問題①日本の工業生産がどこでどのように行われているのか詳しく調べ、特色をつかもう。】	【思判表】日本の工業生産の大まかな特色を捉え、地域や工場の種類などに着目して学習問題をつくり表現している。 【態】主体的に問題を考え追究の見通しをもとうとしている。
2	工業地帯・工業地域の分布や生産額などに着目して、工業生産の盛んな地域の広がりやそこで工業生産が盛んな理由を、輸送などの条件と関連付けて捉えることができる。（知識・理解）		
3	身近な地域の工業生産について調べ、盛んな地域との関わりや相違点に着目し、その特色について把握することができる。（知識・技能）	○実体験や既習を想起させ、県内や市内の工業生産について知っていることを出し合い、工業生産の盛んな地域との条件の違いを考える。 【身近な工業生産には、どのような特色があるのだろうか】 ○甲府市の工業団地、工場の種類、働いている人数などを把握する。 ○ <u>身近な企業（富士製作所）について資料をもとに調べ、工業生産の盛んな地域との関わりや相違点について考える。</u> ◎甲府市の工業生産の特色についてまとめる。	【知・技】身近な地域の工業生産について調べ、工業生産の盛んな地域との関わりや相違点に着目し、その特色について理解している。
4	大工場と中小工場の生産の特色や国内の工場生産に果たす役割を捉えることができる。（知識・技能）	【大工場と中小工場はそれぞれどのような役割を果たしているのだろうか】 ○資料(教科書)から、大工場と中小工場の工場数や働く人数、生産額の割合などを比較し、それぞれの特色を読み取る。 ◎ <u>地域の企業の生産の様子から、中小工場の果たす役割について話し合い、中小工場のもつ高い技術力や努力が大工場の生産を支えていることを把握する。</u> ☆日本の工業生産の特色について記述する。（学習問題①の解決）	【思判表】日本の工業生産の特色について、学んだことを生かして自分の言葉で表現している。
【専門職への依頼②】 リモートでの質疑応答と、現場の課題などの情報の提供			
5	身近な企業の現状から、日本全体の工業生産の課題を捉え、学習問題②を設定し追究の見通しをもつことができる。（思考・判断・表現）	【これからも日本の工業生産は発展していけるのだろうか】 ○ <u>地域の企業の抱える課題を捉える。（新興国メーカーによる影響、少子化による影響、自動車のEV化による新しい対応の必要性）</u> ◎それらの課題は日本の工業生産が発展していく上で問題なのか、それはなぜかを話し合い、さらに調べていく学習問題を設定する 【学習問題②日本の工業生産がさらに発展していくために、大切なことは何だろうか。】	【思判表】様々な視点で日本全体の工業生産の課題を考え、学習問題をつくり表現している。【態】主体的に問題を考え追究の見通しをもとうとしている。
6	視点①「外国との関わりの変化」について、海外生産や海外メーカーの参入の増加に着目し、日本の工業生産における影響を多角的に捉えることができる。（知識・技能）		
7	視点②「少子化の影響」について、中小工場の優れた技術や発想力に着目し、国内の工業生産を守っていこうとする企業の工夫や努力を捉えることができる。（知識・技能）		
8	視点③「社会のニーズの高まり」について、社会的な要請や新たな課題に着目し、人々の生活を支えるものづくりを進めていこうとする企業の工夫や努力を捉えることができる。（知識・技能）		
【専門職への依頼③】 リモートでの質疑応答と、現場の課題などの情報の提供			
9	日本の工業生産がさらに発展していくために大切だと思うことを複数の視点や立場から考察して話し合い、根拠を明確にして自分の考えを表現することができる。（思・判・表）	【工業生産がさらに発展していくために大切なことを話し合おう】 ○これまでのワークシートや振り返りシートをもとに、5つの工夫や取組の中から自分が大切だと思うことを順位付けして表す。 ○一位が同じ者同士でグループに分かれて話し合い、複数の視点や立場から思考ツールを用いて理由付けし、根拠を明確にする。 ○グループごとに質問意見を出し合って議論し、再度順位付けして自分の考えの深まりや変容を実感する。 ◎議論をふまえ、工業生産がさらに発展していくために大切なことを考え、振り返りシートに記述する。	【思判表】工業生産がさらに発展していくために大切だと思うことを複数の視点や立場から考察して話し合い、根拠を明確にして自分の考えを表現している。
10	学習問題について自分の考えを整理し、根拠を明確にして意見文や言葉で表現することができる。（思考力・判断力・表現力）	○前時に使用した思考ツールや、これまでの振り返りシートの記述の蓄積を振り返る。 【工業生産がさらに発展していくために大切だと思うことを整理して、意見文に表そう。】 ○協力していただいた製作所の方に読んでもらうことを意識し、課題に対する自分の思いや願いが伝わるよう考えて書く。 ○書いた意見文の内容をお互いに発表したり交流したりして考えを広げる。	【思判表】学習問題②について自分の考えを整理し、根拠を明確にして意見文や言葉で表現している。
【専門職への依頼④】 リモート・文書での記述の評価とフィードバック			

意見文は専門職にも評価していただき、授業後にリモートでの対話と文書の両方でフィードバックをいただいた。(図3)。互惠関係に関して、専門職にとっても「地元の子どもたちに現実を知ってもらい、課題について一緒に考えてもらうことに意義がある」ということを事前に伺っていたので、それが児童に伝わるよう意識して記述していただいた。そのフィードバックを基に自分たちの記述や単元を通しての学びを再度見直させたことで、学習問題に対する自分の考えをさらに深めようとする児童の姿が見られた。

授業を通して、みなさんが毎回とても深く考えていて感心しました。これからの甲府、山梨、そして日本の工業生産発展のために、私たちはみなさんからの声を活かしていきたいと思います。みなさんの意見を聞いて、社外に向けて積極的にアピールして、どんな会社なのか知ってもらう努力が必要だと感じました。みなさんにはこれからも、社会を豊かにし、支える製造業に興味を持ってもらえたらうれしいです。

図3 専門職からのフィードバック（一部抜粋）

5. 分析と考察

(1) 仮説1：学ぶ意義の実感に関わって

実践前、1つ目の実践後、2つ目の実践後の計3回、同様の項目のアンケート調査を行った。その中で「問1：社会科を学ぶ意義は何だと思いますか」に対して、図4のような回答の分類が見られた。

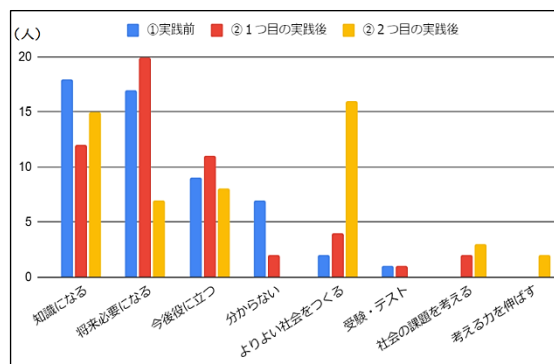


図4 問1への回答の分類と変容 n=54

特に変容の大きかった「よりよい社会をつくる」の分類の中には、「人々の働きを知って、自分たちが次の発展につないでいくため」や「今よりもっと便利でみんなが生活しやすくするため」などの記述が見られた。また、「社

会の課題を考える」の分類の中には、「これからの農業や工業に必要なことをみんなで探していくこと」や「課題について自分たちの考えを深めていくため」などの回答が見られた。

このように、最終的に社会科を学ぶ意義を具体的に記述したり説明したりすることができた児童は54人中45人(83%)という結果であり、8割以上の児童が学ぶ意義を具体的に捉え、実感する様子が見られた。

また、「問2：社会科の学習はこれからの生活の役に立ちますか」に対して、表6のような回答の割合の変容が見られた。

表6 問2の回答の割合の変容 n=54

選択肢	実践前	実践1後	実践2後
役に立つ	45%	48%	56%
どちらかと言えば役に立つ	39%	39%	40%
あまり役に立たない	9%	7%	4%
役に立たない	7%	6%	0%

表7 問2の理由の変容（2名抜粋）

	児童A	児童B
実践前	社会の仕組みがよく分かるから。	生活に関わることを学べるから。
実践1後	色々なことを知っておくことで、これからどうすればいいかわかるから。	社会をよりよくするために、わたしたちは何をすればいいのか考えられるから。
実践2後	色々な場所の仕組みを勉強できるし、自分にもできることがないかなど意識して、少しずつでも変えていけたと思ったから。	わたしたちが社会のことを学べば、将来が今よりもっと便利で暮らしやすくなる工夫が思いつくのではないかなと思ったから。

実践を重ねるごとに「役に立つ」と答える児童の割合が増えていく様子が見られ、「役に立たない」と答えた児童の割合は0になった。3回のアンケート全てで「役に立つ」と答えた児童のうち、2名の理由の記述を見ると、表7のような変容が見られた。授業を通して実感したことをもとに、より具体的で深い内容を記述できるようになっていき、学ぶ意義を具体的に実感していく様子が窺える。

また、「問3：専門職の方に協力してもらった感想を書きましょう」に対しては、1つ目の実践後には85%(46人)の児童が、2つ目の実践後には全員が肯定的に捉える回答をした。記述の分類を図5に示す。

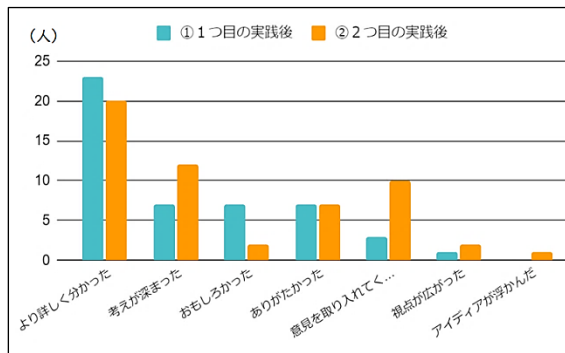


図5 問3の回答の分類と変容 n=54

中でも変容の大きかった「考えが深まった」の分類に着目すると、「実際に現場で働かれている方の協力を借りながら勉強すると、新たに分かる、思いつくことなどが増えて、考えがさらに深まりました。」や「色々な資料で詳しく知れて、学習問題を考えることができました。」などの回答が見られ、専門職の知見を授業内に取り入れたことの効果が窺える。

また、「意見を取り入れてくれてよかった」の分類の中には、「私たちのアイデアを活かしてもらえるみたいで嬉しかったです。これからの社会科の勉強でも、また色々な人に協力してもらいたいです。」や「私たちの考えを取り入れてくれるなんてびっくりしました。工業生産のことについて、詳しく考えてきてよかったと思いました。」などの互惠関係を意識する記述が10名の児童に見られた。それらの児童は全員、問1において学ぶ意義を具体的に記述することができていたため、専門職との互惠関係を構築する授業構成が、児童の学ぶ意義の実感や、より主体的に学ぶ姿勢につながっていると考えられる。

(2) 仮説2：学びの深まりに関わって

学ぶ意義の実感と学びの深まりの関係性を見取るため、アンケート調査の問1において学ぶ意義を具体的に捉えた児童45名に学びの深まりが見られるかを分析した。単元後半の振り返りシートの記述を見ると、多面的・多角的に追究している児童(図6)の割合は69%、記述量が増えていった児童が20%、記述の内容・量ともに変化が見られない児童が11%だった。

新たな学習問題	日本の工業生産がこれからも発展していくために、大切なことは何だろう。	
	学習したこと	学習問題について
21日	外国との関わりについて	外国との関わりについて []のような日本のすごい技術が流出してしまったら日本の強みがなくなるかもしれないので、国内の生産を増やして行くといいと思いました。また、自分たちの製品だけ多く輸出するのではなく、相手の国の物も買ったり外国と話し合ったり協力することがこれから大切になると思いました。
22日	国内の生産と発展を続ける取り組み	今回の授業で、少子高齢化の意味が分かりました。働く人が減って職場の高齢化が進んでいるので、[]のように他の工場では作れない製品を作り出したり、日本の強みである高い技術やアイデアを生かした生産をして若い人に興味を持ってもらうことで、日本の工業生産はこれからも発展すると思いました。

図6 多面的・多角的に追究した児童の記述例(抜粋)

このように、7割近くの児童が社会的事象や課題について様々な視点や立場から多面的・多角的に考察して記述しており、学びの深まりが見られる。また、授業を進めるにつれて記述量が増えていった児童も合わせると、約9割の児童が主体的に学びを深めようとしていることが窺える。

同様に、アンケート調査の問1において学ぶ意義を具体的に捉えた45名の児童のうち、最終的に学習問題に対して自分なりに判断し表現することができたかどうかを分析する。それらの児童が作成した意見文の記述を見ると、明確に根拠を示して判断している児童(図7)が80%、判断できたが根拠が浅い児童が20%という結果が得られた。判断できなかった児童はいなかった。

私は、これからの工業生産が発展していくためには、社会や利用者のニーズに応える物づくりを行うことが大切だと思います。理由は、そうすることでより社会の環境問題を解決することができたり、[]のように素晴らしい技術を活かして利用者に喜んでもらえるものがつくれると思ったからです。私も消費者として、そんなものづくりを進めてくれたら嬉しいし、SDGsなどが工業を通して達成できたらいいと思います。また、海外のニーズにも応えて生産を増やしていくことで、外国と一緒に発展していけるんじゃないかとも思います。ですが、すべてのニーズを把握して生産を行うのは、費用や時間がかかることも分かりました。なので、まずは環境問題からなど、目標を決めてできることから取り組んでほしいと思います。私たちの住む未来が、工業生産で今よりも暮らしやすくなっているとうれしいです。

図7 根拠を基に判断し表現した児童の記述例(抜粋)

このように、8割の児童がこれまでの考察や議論して得たことなどを根拠に判断して自分の言葉で表現していることから、学びを深めていることが分かる。その中には専門職からの情報や課題から考察したことを判断の根拠にする記述も多く見られ、専門職との互惠関係の構築が児童のより深い学びに貢献したことが示唆される。

6. 成果と課題

本研究では、ニューマンの学びのスタンダードを基にした小学校社会科での授業実践を行い、現実社会の共同体との互惠関係を意識させる手立てが児童の学ぶ意義の具体的な実感を促し、主体的な考察とそれをもとに自分なりに判断し表現する深い学びを実現することへの有用性を見ることができたと考える。「学校外での価値」を軸に系統的・段階的な構想表に基づく授業構想を行うことで、第5学年の産業学習においても、児童にとっての学びの真正性を生み出すことに寄与することができたと言えるだろう。

課題として、以下の2点を挙げる。1つ目は、学ぶ意義を具体的に実感できない児童への対応である。2回目の実践後も学ぶ意義を具体的に記述したり説明したりすることができない児童が9名いた。今回は専門職との関わりにのみ焦点を当てて授業を構想したが、より多くの児童が学ぶ意義を捉えることができるよう、地域のコミュニティや行政など他の共同体との関わりにも着目したり、学ぶ意義について児童同士で考えを交流させる時間を設けたりするなど、さらなる手立ての工夫が必要であると考え。

2つ目は、学習内容の増加についてである。専門職との互惠関係を築く授業づくりにおいて、読み取る資料の追加や毎時間の振り返りシートの記述などを単元を通して行い、その効果が見られた反面、予定より時間がかかってしまったことは否めない。必要な学習内容や教材を見極め、児童の負担が大きくなりすぎないように、入念な事前準備が必要である。

7. 引用・参考文献

- ・フレッド・M・ニューマン著（2017）渡部竜也他訳『真正の学び／学力 質の高い知をめぐる学校再建』春風社
- ・後藤賢次郎他著（2021）『新・教職課程演習 17 巻 中等社会系教育』協同出版
- ・ハロルド・バーラック他著（2021）渡部竜也訳『真正の評価 テストと教育評価の新しい科学に向けて』春風社
- ・石井英真著（2015）『今求められる学力と学びとは ―コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影―』日本標準
- ・紙田路子（2008）「市民的資質を育成する小学校社会科授業の設計―『正統的周辺参加論』を手掛かりとして―」『社会科教育』69,21-30
- ・文部科学省（2018）「OECD 国際教員指導環境調査（TALIS）2018 報告書―学び続ける教員と校長―のポイント」（https://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2019/06/19/14_18199_2.pdf）（最終閲覧日：2024年2月10日）
- ・文部科学省（2017）『小学校学習指導要領解説社会編』
- ・佐長健司（2012）「社会科授業における問いの状況論的検討―正統的周辺参加としての学びを求めて―」『社会科教育研究』115
- ・田本正一（2017）「市民社会への参加に注目した社会科学習評価の検討―小学校3学年における学習者のナラティブを事例として―」『社会科研究』86,25-36